

# 「レターバス」 利便性向上へ

合志市は、市内の主な商業施設や住宅街などを巡るコミュニティバス「レターバス」のルートとダイヤを、10月1日から大幅に刷新する。人口増加や街並みの変化に対応したバス網見直しで利便性を向上させ、利用者増を狙う。

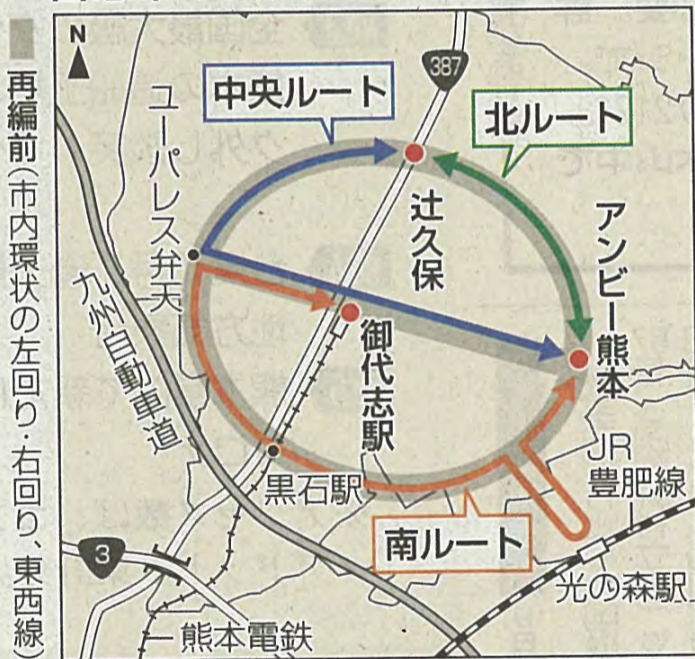


10月1日からバス網が再編され、4台態勢となるコミュニティバスの「レターバス」＝合志市

## 合志市 来月から大幅刷新

### 増便、待ち時間短縮／商業集積地を発着

合志市のレターバス再編イメージ



再編前(市内環状の左回り・右回り、東西線)

2010年導入のレターバスは28人乗りで運賃は一律150円。19年度は1便当たり10・7人、計7万4973人が利用した。市と県によると、運行経費に対する運賃収入の割合を示す収支率は18年が19・7%で、県内9市町村の一律料金のコミュニティバスで最も高かった。

バス網再編は7月、市地域公共交通再編実施計画に基づき、地域の団体代表や大学教授らでつくる協議会(松永信弘会長)で決定した。市企画課は「利用者の新規発掘につなげたい」と意気込む。

現在のバス網は、市内環状線の左・右回り(1周33キ)と、環状線の内側を東西に横切る片道9・5キの計3ルート。各1台ずつ計3台で運行している。

再編では環状路線と環状内側の東西路線を北、中央、南の3ルートに分割し、それぞれ往復運行。バスを1台増やし、人口が集中する

南を2台態勢にした。JR光の森を経由する。全72バス停で2〜4便増やし、待ち時間は2時間から30分短縮される計算。

バスの発着点は同市竹迫の商業集積地「アンビー熊本」に設定。同所は市内各所に向かう乗り合いタクシー2路線が発着しており、乗り継ぎの利便性を図った。

再編は市内から菊陽町などに流れていた買い物客に、地元での消費を促す狙いも。市によると、「ゆめタウン光の森」のバス停2カ所の19年4月の乗降者は、計2125人と全バス停で最多だった。買い物などに毎日利用している同市豊岡の主婦、中村栄子さん(72)は「光の森方面は渋滞が多い。新路線ができたならアンビーも利用したい」と話す。

新ルートでは、乗り継ぎ拠点が増えるため、市は全戸にガイドマップを配布した。協議会メンバーの斉場俊之さん(46)は「スムーズに乗り換えられるよう、バス停の案内表示の充実も必要」と指摘する。

課題は収支率の向上だ。計画では利用者の約30%増を見込む一方、運行経費は32%増の7819万円と試算。その結果、収支率は現状より低い16・5%にとどまる。新型コロナウイルスの影響で、今年3〜6月の乗客数と運賃収入は、前年同期比でそれぞれ40%減っており、計画の収支率予想をさらに下回る可能性もある。

「収支率より、市民の利便性を重視した」と市企画課。協議会副会長で熊本大大学院先端科学研究部の溝上章志教授(交通まちづくり)は「収支率は30%程度が望ましく、少しでも上げる工夫が必要。安心して利用してもらったための感染防止対策も重要だ」と話す。

(木村恭士)



継ぎ拠点が従来の4カ所から6カ所に増える

ため、市は全戸にガイドマップを配布した。

協議会メンバーの斉場俊之さん(46)は「スムーズに乗り換えられるよう、バス停の案内表示の充実も必要」と指摘する。

課題は収支率の向上だ。計画では利用者の約30%増を見込む一方、運行経費は32%増の7819万円と試算。その結果、収支率は現状より低い16・5%にとどまる。新型コロナウイルスの影響で、今年3〜6月の乗客数と運賃収入は、前年同期比でそれぞれ40%減っており、計画の収支率予想をさらに下回る可能性もある。

「収支率より、市民の利便性を重視した」と市企画課。協議会副会長で熊本大大学院先端科学研究部の溝上章志教授(交通まちづくり)は「収支率は30%程度が望ましく、少しでも上げる工夫が必要。安心して利用してもらったための感染防止対策も重要だ」と話す。

(木村恭士)